

# 隨泉寺寺報

平成28年（2016年） 11月号 第555号

Tel.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

## 後期門信徒講座

講師 住職 自修

講題 『生活信条について』

★ 「浄土真宗の生活信条」を考えてみようと思います。浄土真宗の生活信条は、

1958（昭和33）年4月16日に発布の、大谷本廟親鸞聖人七百回大遠忌法要「御満座の消息」において勝如上人（前々門主様）がお示しになられたものです。

- 一、み仏の誓いを信じ 尊いみ名をととなえつつ強く明るく生き抜きます
- 一、み仏の光りをあおぎ 常にわが身をかえりみて感謝のうちに励みます
- 一、み仏の教えにしたがい 正しい道を聞きわけてまことのみのりをひろめます
- 一、み仏の恵みを喜び 互にうやまい助けあい社会のために尽します

### 11月の法座予定

- 11月 2日……………本部役員会
- 11月 13日午前8時より……………掃除 荒野
- 11月 15日朝席午前10時より……………門信徒講座 役員研修会 お齋
- 11月 15日昼席午後1時より……………映画【海街ダイアリー】
- 11月 15日昼席終了後より……………旅行説明会
- 12月 2日昼席終了後より……………門信徒会本部役員会 忘年会

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

—浄土真宗一口法話— 11月

「聴聞は他人ごとを自分のことだと教えてくれる」（篠直）

「浄土真宗はお念仏して阿弥陀如来さまに救われるという簡単な仏教だ」という方がおられます。言葉の上では当たっていますが、取り違えると、困ったこととなります。理屈だけわかっても、人ごとであつて、我がこととならなければ、救いにはなりません。何故、私が救われるのか、繰り返し、教えを聞き、我が身に引き当てて思いめぐらすことが大事です。

もう一つは、修行も戒律も要らないという意味で、易しい道ですが、それと一対になっているのは、人生の難しさではないでしょうか。さまざまの悩みを抱えていらっしゃる方には申すまでもないことですが、何も心配事が無いという方でも、毎年、交通事故死が数千人、自から命を絶つ人が三万人以上と聞いて、自分の生き方を考えないわけにはいかないのではないのでしょうか。

日々の仕事を精一杯勤める中で、阿弥陀如来さまのお慈悲が有り難く味わわれ、お慈悲の中でこそ、自分の勤めを精一杯勤めることができるのです。

## ☆役員研修会 映画 【海街ダイアリー】

11月15日午後1時より



鎌倉に暮らす長女・幸、次女・佳乃、三女・千佳の香田家3姉妹のもとに、15年前に家を出ていった父の訃報が届く。葬儀に出席するため山形へ赴いた3人は、そこで異母妹となる14歳の少女すずと対面。父が亡くなり身寄りのいなくなってしまうすずだが、葬儀の場でも毅然と立ち振る舞い、そんな彼女の姿を見た幸は、すずに鎌倉で一緒に暮らそうと提案する。その申

し出を受けたすずは、香田家の四女として、鎌倉で新たな生活を始める。



6.13歳

## どことても み手のまんなか おかげさまのどまんなか

東井先生は二十七歳のとき、お父さんを亡くされました。七年間も病床にふせっておられたお父さんの様子を見るため、ある日、東井先生は豊岡から帰宅されました。思いがけない日の、思いがけない時刻（夜半）の帰宅に、たいへん喜ばれたお父さんは、東井先生にこう言われたそうです。

「生きておれば」何の役にも立たんわしを、おまえがこうして案じてくれる。いま、息が絶えても、大きな大きなお慈悲のどまんなか。世界中に、ぎょうさん人間は住んでいるが、わしほどのしあわせ者が、ほかにあろうかい」この言葉は、次第に小さくなって消えていったといいます。六十三歳のご往生でした。東井先生のお父さんは、たいへんありがたい念仏者でした。いつも、阿弥陀さまのお救いと、阿弥陀さまのみ手のどまんなかになんか生きていただいていることを、よろこばれていたそうです。このお父さんの最後の言葉を、たまたま家に帰って思いがけなく聞かれた東井先生は、のちにこうふり返っておられます。



「若い私は、その事実を、父が、『人間に生まれさせていただいた以上、（生きても、死んでも、しあわせのどまんなか）という世界に到達できなかつたら、人間に生まれさせていただいたねうちはないのだよ』と教えるために、私を呼び寄せてくれたのだと思いました」



また、東井先生の晩年の著書では、お父さんのことを、このようにも味わっておられます。「ひょつとすると、あの父は、如来さまが、私のためにお遣わしくくださった、如来さまのお使いであったかも知れないと思うのです。（中略）いつ壊れても不思議でない体です。『終わりの時』は目の前にあるのです。でも、『いつ壊れてもみ手のまんなか』です。終わってから『み手のまんなか』に捨てただくのならば、『ひょつとして、捨てただけなかつたら……』という不安もあるでしょうが、現在ただ今、既に『み手のまんなか』なのですから、死にざまなどかわりなく、『いつ壊れてもみ手のどまんなか』なのです。

も、『いつ壊れてもみ手のまんなか』です。終わってから『み手のまんなか』に捨てただくのならば、『ひょつとして、捨てただけなかつたら……』という不安もあるでしょうが、現在ただ今、既に『み手のまんなか』なのですから、死にざまなどかわりなく、『いつ壊れてもみ手のどまんなか』なのです。

この安らぎの世界に目覚めさせてくれたのは父です。父はやっぱり、まちががなく、如来さまのお使いだったにちがいません」こちらが意識するしないにかかわらず、阿弥陀如来さまの、お救いのみ手のどまんなかで、生かさせていただいているという、東井先生の念仏者としての深い味わいが、そこにあります。私たちにとって、東井先生は、如来さまのお使いだったのでした。

## 旅の行く先

皆さんと本願寺にお参りしてきました。旅は楽しいものです。「人生は旅」とよくいわれますが、旅の行き先（目標）があるはずで。旅をするのに大事なことは「どこに行って、何をするか」また「何をするために、どこへ行くのか」ということでもあります。人生の旅はやり直しができません。この命が終わって、期待したほどでなかったから、もう一度という訳にはいきません。人生の真最中にあるものにとっては、まさに一大事の問題です。



本願寺にお参りするのですから、目的ははっきりしています。納骨であったり、お剃刀を受けて法名をいただいたり、ご門主様の継職法要にお参りするということです。またすべてが、用意されている所へ往くのですから、安心です。きれいな景色、みんなと食べる楽しい食事、その他たくさんの楽しいことがあると思います。しかし、よくよく考えてみますと、旅先で楽しく過ごせるということは、帰って行く家庭があり家族があるからです。もしも、旅先で「あなたのお家が火事で焼けましたよ、悲しいことに…」と伝えられたとき、旅行は安心から不安となり、楽しみなどありません。私たちの人生も必ず帰って行く浄土があるからこそ、今を生きれるのではないのでしょうか。



ご門徒の方で「ご院家さん、私が死んだら頼みますよ」と言われる方がいます。私は「何を頼まれたのか」考える時があります。その方は「よい所へ、浄土へ参らせて下さい」とお願いしているのだと思います。しかし他人の人生を生きることにはできません。自分の人生です。自分の旅です。ご本人が今、人生の旅の真最中です。私の旅の目標は「必ずお浄土に生まれさせていただくにまちがない身」にさせていただくことなのでありますから、真剣に阿弥陀如来のみ教えを聴聞し、お念仏させていただくことなのです。

真剣に阿弥陀如来のみ教えを聴聞し、お念仏させていただくことなのです。